

道行碑 遍照門主篆額

信岳師は、一名を勇進。姓は高田、木辺派の末寺、近江国野洲郡河西村の西蓮寺住職、信成公の次子です。文政十一年（一八二八年）十月二十日生。十四歳、得度を受けました。十八歳で、志を立て、（滋賀県の）日野の溪へ遊学を決意しました。ここを発つ日の朝、箸を折って自ら誓って言われました。もし、学問を立派に修めることができなければ、再び、この家には帰ってこないつもりです。宗乘（真宗の教え）を聖財鳳公に学び、余乘（仏教一般の教え）を即住興公に学ばれました。

一生懸命に生活をし、勉学を怠りませんでした。わずかな灯明油で夜も寝ないで研鑽に励まれました。ある日、「小学」という書物を与えられた時、一夜で其の序を読み、内容を要領よくまとめ翌日それを提出しました。人はとても驚嘆し、そのすばらしさを言葉で表すことができなほどでした。十二年余りの年月が過ぎて、学業を立派に修め、郷里に帰り、学問所を開きました。そこに弟子入りし学ぼうとする人が先を争いました。元治元年（一八六四年）に、西蓮寺住職を継ぎ、賢慈門主の侍講（指導者）となりました。門主は「自分は幼くて孤独で両手のない者のようであったが、今、先生に出会って両手を獲ることができた」と感嘆され、次のように、重要な役目を与えて用いられました。明治維新の初めの頃、天下は騒然とし、その余波が仏教界に及んできました「廃仏毀釈」。この時、先生は、事の本末を心得て大きく貢献をされました。明治八年、門主が東京へ交渉に行かれた時、随行として供をされました。

明治十年に大乘院の号を賜り、十一年に累進し大講義に、十四年に碩学となられました。十八年に門主が遷化され、後を継がれた淳慈門主が未成年の為、代理管長の事務を拝命されました。三十二年に一代本座上首を賜りました。

是より先、三十一年に宗祖遠忌を本寺において厳修されたとき、年は七十一歳でした。住職を引退するとき、後を嗣ぐ者がなかつたので、奥さんの里、藤林氏の弟を後継者に迎え、その後は、世間の事に関係されませんでした。

先生は、性格が恭謙（つつましやか）で、尋ねることに恥じることがありませんでした。そして、本山で執事となられる事、三回、安居の講師を二十一回、教養の教授を十二年、勤められました。浄土真宗の聖教書物を余すところなきほどに講述されました。

本寺において、本堂の改修をされ、梵鐘堂を建てられ、藏経（経本）を安置されるなど、およそ、計画された事はことごとく成し遂げられました。その徳望は以て知るべしで、先生は、いわゆる法門の龍象とも云うべきお方です。門弟たちは、その功績を顕彰する碑を建てようと話し合いました。その功德が門主に聞こえ、門主はこれをお褒めになり、篆額を賜りました。文章を私に要請され、私は、先考（父）が先生と善友であり、私もまた早くから親しくさせておりましたので辞退することができませんでした。そこで、門弟たちが記した行状でその概略を銘でもって申し述べさせて貰います。

明治三十四年六月

龍谷門侶、圓照前任住持、慈恩、文章を作りて書く

「銘は略」